

「墓に葬られたイエス」

マルコによる福音書15章42-47節

森島 牧人 牧師

来週からアドベント(降誕節)に入りますが、私たちは先回りに続いて今日も主イエスの御生涯の最後のところ、十字架の上で亡くなられ、墓に入られた主イエスについて学ぼうとしています。というのも、世界中で祝われるクリスマスですが、主イエスの御生涯はその誕生の瞬間から十字架の死に向かって始まるものだったからです。

今日の聖書が丁寧に語っている一つは、<主イエスが死んだ>という事実です。神が自分の息子を死に引き渡したということです。つまり百人隊長の確認の後、ピラトから下げ渡された罪人としての呪われた主の遺体をヨセフは丁寧に葬りました。この記事は主イエスが死者となって墓に入られたということを明示しており、私たちの救いと信仰にとって深い意味があることを示しています。

私たちは礼拝で、「主は・・・十字架につけられ、死んで葬られ、よみにくだり、・・・」と、「使徒信条」を告白しています。しかし初期の教会では、この「主の死」についての論議は否定的であり、それは長い間続きました。というのも、<真の神である主イエスが、私たちと同じように死ぬことなどあり得ない>と多くの人が考えたからです。しかし主は馬小屋で人として生まれ、罪人として十字架上で死に、墓に葬られたのです。まさに<人間>として存在されたのです。ハイデルベルク信仰問答の問41に「何故に、主は葬られたのですか。」 答え「まことに死んでしまった、ということ、を、証しするためであります。」という問答が書かれています。つまり、主が真の人になられたということは、そのまま主が真に死なれたということを含んでいるのです。そしてその事が、私たちの救いにとって非常に重要なことなのです。

ヘブライ人への手紙2:14-15に「子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、・・・解放なさるためでした。」とあります。つまり主が死の苦しみを知らずとなってくださったということは、主が人となってくださったということで、死に至るまで私たちと等しくなってきたということの意味です。Iテサロニケの信徒への手紙5:10に「主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。」とあります。この中の「目覚め」と「眠り」は私たちの生と死を意味し、主は私たちの生の中に於いてと同様に、死に於いてもまた、共にいてくださると語っているのです。

さて「死」が意味を持つのはその<人格性>の故で、人格性が奪われると人間は物と化します。大量殺戮の死に個人の名前はなく、あるのはその数だけです。本来人間の死は一人の死であり、墓はその死が人格の死であることの印です。主も墓に葬られましたが、それは他人の墓でした。馬小屋での誕生から墓所に至るまで主の生涯は、一貫してヴィア・ドロローサ(苦難の道)を歩むものでした。聖書には、主イエスは、まさに人間の死の極限を担い、人格性を失い、物と化したと記しています。

そのような主が葬られた当時の墓は岩を掘ったもので、死者と生者を隔てる境には大きな石が蓋として置かれていました。つまり、主が私たちのために三日間という時を確かに遺体となって黄泉で過ごされたということを、私たちは忘れてはなりません。主は、墓の中で最も威力を発揮しておられたからです。

私たちは、主を思う時、さまざまな場面の主の姿を思い浮かべます。しかし十字架がキリスト教を象徴するように、十字架上で絶命された主イエスの姿をこそ、その中心に置かなければならないのです。

存在している私たちを脅かすものこそが非存在、死です。しかし主は<存在>と<非存在>の両方の中で受肉されたのです。つまり私たちのために死体となり給うたが故に、主イエスは<インマヌエルの神>として居られるのです。ですから私たちは、主が墓の中におられたということによって大きな安らぎを得ます。私たちがたとえ死者となったとしても、主イエスもまた、そこにおられたと確信出来るからです。

このように、主イエスの葬りの物語が十字架上の死と切り離せないのは当然のことです。しかし主の<復活>もまた、葬りの物語と切り離すことは出来ないのです。この時、ヨセフの葬りの業をじっと見ている女たちがいたのです。その女たちは主の墓の在り処をも確かめていました。そして安息日の過ぎた早朝、再びここを訪れた女たちは、主の葬られた墓が空であることを発見することになります。つまり主イエスの確かな死を見届けた女たちは、さらに主の復活の証人ともなるのです。ここに神さまのなさりよりの不思議を思うのですが、これこそが、私たちが驚かざるを得ない出来事、つまり神の出来事なのです。その意味で、主の死と葬りはまさに、「復活すべき方の死」であると聖書は語っているのです。

(説教要約 羽入田悦子)